九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

特別活動におけるカリキュラムマネジメントの研究：「運動会」を通した「学校改善」・「学校づくり」の実践事例研究

倉本, 哲男
九州大学大学院人間環境学府博士後期課程修了 | 熊本県水俣市立袋小学校

https://doi.org/10.15017/3454

出版情報：教育経営学研究紀要. 8, pp.11-17, 2005-03-31. 九州大学大学院人間環境学府(教育学部門)教育経営学研究室/教育法制論研究室
バージョン：
権利関係：

教育経営学研究紀要　第8号　2005年　11－17

特別活動におけるカリキュラムマネジメントの研究
～「運動会」を通した「学校改善」・「学校づくり」の実践事例研究～

倉本　哲男
（熊本県水俣市袋小学校／教諭）

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．学校改善」論にみるカリキュラムマネジメント
Ⅲ．「運動会実践」のカリキュラムマネジメントによる「学校づくり」
Ⅳ．　調査概要
Ⅴ．　調査結果および考察

Ⅰ．はじめに

本研究は、学校経営の中心であるカリキュラムの開発・経営がどのような学校改善効果を持ち、学習者である児童にどのような学習効果をもたらすのかを命題に、教育経営学と教育方法学が相互補完的に重なる「統合」的な領域を研究対象とする。

近年の学校教育のカリキュラム研究領域において、一定のカリキュラム目標の下に開発された内容・方法論が、カリキュラムの学習主体者である児童の発達にとって「如何なる教育的効果を上げるのか」等の側面に加えて、これまでのカリキュラム条件整備・組織運営の「カリキュラムを誰が創りどう動かすのか」等との両側面を包含する研究も注目を浴び始めている(1)。

これまでの我が国における教育課程経営論では、例えば高野の枠組は、教育課程経営を教育課程の内容の系列とそれを支える経営系列とを対応させた活動系列として、これを捉えていく必要性があることを関係者に認識させたと評価される(2)。また中留は内容・方法的側面と条件整備的側面の精緻化を意図して、総合的な学習の基軸を「連関性」と「協働性」として提示した。

この意義は、カリキュラムの内容方法的研究と条件整備的研究とを「統合」する領域を包含する理論の重要性を問題提起したことにあり、学校において両側面を「統合」的に整理するのがカリキュラムマネジメント(Curriculum Management)論である。このカリキュラムマネジメント論は、第一に、カリキュラムPDS過程から改善・計画過程へとフィードバックする全経営過程を一体性・発展性のカリキュラム論として把握し、第二に、学校内外の諸条件を整備することによって児童の教育効果を高めるために組織改善をする経営活動という意味から、これを中核に据えることは「学校改善」論に有効性を持つ(3)。

この先行研究に位置付く中留等のカリキュラムマネジメント論は、「従来の週時程における教科目の配列という静態的なカリキュラムとする見解を越えて、わが校の教育目標達成のための教育内容・方法上の指導系列(Curriculum & Instruction)としての教育活動と、それを支える条件整備としての経営活動(Management)との二系列において、目標に対応した成果を生み出すトータルな活動という動態的な教育課程観への転換を図ったコンセプトである」と定義される(4)。

しかし、中留等の国内研究では、特定の教育課題・内容や、学習者への教育的効果、更には学校と地域社会とのカリキュラム経営主体論等には残余部分があると整理でき、その一端を明らかにするところに本研究の意義がある。

以上の課題意識から、本カリキュラム研究における「統合」的領域とは、「教育経営学的な対象領域である学校組織の教職員意識等に焦点を当てた条件整備的側面と、主として教育方法学等が対象としてきた児童の学習・成長的側面の二系列を包含する領域」とする。

ところで、我国の学校教育では、指導要領によって目標論が限定され、教科書によって授業内容も具体化され、指導書のマニュアルに大部分の教師が依

存する現状を考慮すれば、我国のカリキュラムマネジメント論は成立するのかとの疑問もある。確かに国算社理等の教科教育では、上記の現状も否定できない。しかし、例えば小学校の場合、平成 14 年より総合的学習が導入されて以来、これに特別活動・道徳の領域を加えれば、時数上は学年に応じて全カリキュラムの約 20%－25%にも及ぶことになる。

こうした条件の視点から、本研究では特別活動論のなかでも学校組織全体で取り組む典型的な「運動会実践」を事例に、その二系列を「統合」するカリキュラムマネジメント論の一断面を整理していく。「運動会実践」は、小学校の教育実践では体育教科と特別活動の体育的行事とを「統合」する学校経営上重要なカリキュラムである。更に「運動会実践」は、「集団の一員としての自覚を深め、協力してよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる」と掲げる特別活動の目標に典型的に合致し、これに学校組織全体で取り組むことによって、結果的に「学校改善」がなされていくと考えられる。

以上のことから、本研究では第一に、「学校改善」論からみるカリキュラムマネジメント的要素を特に条件整備的系列から整理し、その際に我国に転用可能な米国の「学校改善」(School Improvement)論も参考にする。

第二に、その「学校改善」論の理論的枠組みに対応する「運動会実践」の内容・方法的系列を特別活動の視点から整理する。それは、学習者である児童の視点から、特別活動論の学校集団論は、学校レベルでの児童の個性の伸長と集団性向上を意図するものであり、教育経営学の「学校改善」論とは異なる視点を含み示唆に富むからである[5]。

第三に、そのカリキュラムマネジメントの条件整備論と内容方法論の二系列を「統合」する理論的枠組みを実証する意味で、筆者の勤務校である小学校を事例に取り上げ、条件整備論を教職員に、内容方法論を児童にと意識調査を実施して検証していく。

よって、本研究は特別活動の視点から「運動会実践」に焦点を当てて、カリキュラムマネジメントの二系列が「学校改善」・「学校づくり」に効果を持つことを、本実践事例研究を通して理論的・実証的に整理するものである。つまりこれは、カリキュラムマネジメントによる「学校改善」論を、特別活動教育論の分析視点から、その一断面を明らかにすることを研究上の目的とする。

Ⅱ．「学校改善」論にみるカリキュラムマネジメント

ここで、「学校改善」論について若干の考察を加える。「学校改善」には問題解決性・教育経営の活性化・ポジティブ学校文化形成・自主的/自律的な組織体・開かれた協働性等の項目が挙げられる[6]。一方で、米国の School Improvement 研究の一環に、学校組織の存在意義とは生徒の知的・人間的成長の教育機関であることが究極的な重要項目であり、カリキュラム開発とその実施を通してカリキュラム目標が生徒の成長・変容に反映されることを評価し、このカリキュラムの PDS 過程をもって「学校改善」と把握する研究もある[7]。

このことは、これまでの教育経営学全般に課題とされてきた学習者の「学習に対する効果性・変容性」が検証されなければ、「学校改善」効果は単なる組織性の課題に置き換えられ、学習者抜きの組織経営論に終始することに対する問題提起とも解釈できる。その意味での組織経営論では、アウトプット因子を取捨したブラックボックスの組織内部構造に限定した論考に過ぎず、この視点に留意した本研究の「学校改善」論では、アウトプット因子をカリキュラム目標論の具現化として捉え、それに合致した「教育目標論」「求める児童像」「児童の変容」等の因子を検証することも重視する。

よって、本研究の「学校改善」とは、「学校組織構成員が、児童の行動変容を意図したカリキュラム目標を共通理解し、その達成のするために学内外の支援を得ながらも、なお自律的な社会的組織体として、学校内外の開かれた協働文化を形成しながら自己改善を遂行する組織的な経営活動であり、同時にその改善効果を学習者である児童の成長・変容に求める教育活動」と定義する[8]。

以上、学校経営の中心であるカリキュラムの開発・経営がどのような「学校改善効果」を持ち、学習者である児童にどのような学習効果をもたらすのかを命題に、「運動会実践」カリキュラムマネジメントのアウトプット因子には、児童に成功感・達成感を味わわせることで、主体性・集団性の育成、更に問題解決等の諸能力の伸長等の指導系列を本研究の全体構造に加えた。

Ⅲ．「運動会実践」のカリキュラムマネジメントによる「学校づくり」

1．特別活動における「運動会実践」のカリキュラムマネジメント

まず、本研究における「運動会実践」とは、単に「体育授業」発表の場として把握するのではなく、「学校改善」効果に着目する必要上、学校組織全体に関わるカリキュラムマネジメント活動との意味で、これを主として特別活動の体育的行事の一環と位置付ける[9]。

ここで、一般に特別活動論における「学校改善論」は、「学校づくり論」の視点から論じられている[10]。

この「学校づくり」論は、学校組織構成員が、学校内外の開かれた協働文化を形成しながら自己改善を遂行する組織的な経営活動の視点を強調する「学校改善論」に加えて、その改善効果を学習者である児童の成長・変容に求める教育活動に焦点を当てたものである。児童の教育活動を通して、児童の集団性が培われ、教育の場としての学校がより高まっていく。

この視点から見た学校レベルでの「集団づくり」を「学校づくり」論としている。

そこで特別活動の教育目標は、「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図るとともに、集団の一員としての自覚を深め、協力してよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる」ことにある。 その内容が学級活動、児童会活動、学校行事等に分割される。

学校組織の一部としての学級活動においては、学級を単位として学級や学校生活の充実を図り、健全な生活態度の育成に資する活動を行うことが基本である。学級や学校における生活上の諸問題の解決、学級内の組織づくり等を通して学級や学校生活の向上に貢献することも重要になる。また、学校の全児童をもって組織する児童会などを通した「学校づくり」おいても、学校生活の充実のために諸問題を話し合い、協働して問題解決的活動を行うことを主眼としている。

これらの要素によって構成される「学校づくり」では、全校単位で学校生活に秩序を与え、集団への帰属感を深め学校生活の発展に資する体験的活動を行うことが、主要な特別活動の教育目標である。その典型例である「運動会実践」に関しては、心身の健全な発達や健康の保持増進等に関心を高め、安全な行動や規律ある集団行動の体得、運動に親しむ態度の育成、責任感や連帯感の涵養、体力の向上などに資する活動を行うことが教育目標に据えられている。

では、なぜ「運動会実践」のカリキュラムマネジメントが「学校づくり」に有効であるのか、ここで考察を加えてみる。

まず、学習指導要領の特別活動編[11]の知見から、学校組織全体に関わる「運動会実践」のカリキュラムマネジメントの実施に当たって配慮すべき事項を、以下のように挙げてみた。

①学校の創意工夫を生かすとともに、学校の実態や児童の発達段階などを考慮し、児童による自主的、実践的な活動が助長されるようにすること。また、家庭や地域の人々との連携、社会教育施設等の活用などを工夫すること。

②運動会の取り組みにおいては、学級活動などにおいて、児童が現在及び将来の生き方を考えることができるよう工夫すること。

③運動会運営に関わる学級活動、児童会活動の指導については、活動の特質に応じて、教師の適切な指導の下に、児童の自発的、自治的な活動が効果的に展開されるように児童相互の協働化を図れるよう工夫すること。

④体育的行事については、学校や地域及び児童の実態に応じて、行事及びその内容を重点化するとともに各教科との関連を図って実施すること。また、運動会運営に当たっては、幼児、高齢者、障害のある人々などとの触れ合いも含めて社会体験等の充実も図れるよう工夫すること。

以上の事項は、特別活動を主とする「運動会実践」が、学校組織全体によって児童の自発性・集団性を育み、心身の成長を助長する典型的な教育的行事であると同時に、運動会運営に関わる諸計画を企画し、内部的協働性によって条件整備を進めるマネジメント活動の発想を必然的に含むことを意味している。

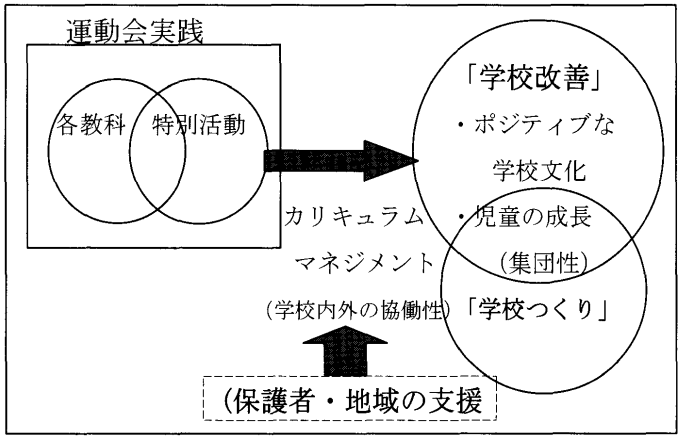
また、このことは、学校組織全体が、「運動会実践」における教育ビジョンを共有化し、学校内外の協働文化の形成によって自己改善を遂行する組織的な経営活動という立場での「学校改善」論と、児童

の視点から見る「学校づくり」論が、カリキュラムマネジメント論の二系列を相互補完的に「統合」するものと整理できる。

次に、以上の事項を総括して、特別活動におけるカリキュラムマネジメント論の理論的枠組みの整理を進め、本研究の仮説を提起する。

2.「運動会実践」カリキュラムマネジメントの検証の理論的枠組み

特別活動を主とする「運動会実践」のカリキュラムマネジメントにおいて、指導系列では特別活動と体育等の教科的要素とを融合し、これと「統合」する経営系列を学校内外の「協働性」の視点から、包括的に整理する。この指導・経営活動が「運動会実践」カリキュラムを創り、動かし、そのカリキュラムを中核に据えることで「学校改善」をなすことを以下の図1に構造化した。



(図1　運動会実践のカリキュラムマネジメント)

また、この構造図は、「運動会実践」のカリキュラムマネジメント論の全体性が、地域の支援によって基本的な経営基盤を形成することを示している。このことは、特に「運動会実践」に特徴的なことであり、地域によっては運動会カリキュラムマネジメントの経営主体になる場合もあり、地域参画型の運動会実践も少なくはない。これは、学校組織と保護者・地域との関係性を構築する「外部的協働性」、それを補完する学校組織内の全教職員の「内部的協働性」によって構成され、この二つの因子の関係性が「学校改善」の重要因子となる。

また、「学校づくり」の視点からは、「個を生かす」「一人ひとりを生かす」「全員参加」「一人一役」「支持的風土」「容認支援」などを掲げる研究団体もあり[12]、「個性を生かす集団づくり」をどう進めるか、「集団の中で個性を、どう開き・生かし・育てる」かを究極の目標に「学校づくり」を進める場合もある。

よって、カリキュラムマネジメント研究の基本的な重要課題とは、「カリキュラムの開発・経営論を中核に据えることが、学校システムの改善過程に如何なる有効性を持つのか、学習者にとって如何なる教育効果を上げるのか」である。

これを明らかにする一環として位置付く本研究の「運動会実践」カリキュラムマネジメント論の仮説は、以下の通りである。

「『運動会実践』は学校の創意工夫により保護者・地域との協働を図り、教職員の一致団結による共通理解によって実施される典型的な組織的実践であることから、『運動会実践』のカリキュラムマネジメントは、児童の集団性・自主性に関わる要素を育成し、『学校改善』『学校づくり』に有効である。」

次に、この理論的枠組みと仮説を検証する意味で、筆者の勤務校の「運動会実践」を事例に、その実証を試みる。

Ⅳ. 調査概要

本事例研究で実施した「平成16年度・運動会に関する意識調査」の概要は下記の通りである。なお本調査は、筆者の勤務校である熊本県水俣市立袋小学校(児童数 285 人・学級数 11)を対象とした[13]。

① 調査目的：図1に示した「運動会実践」のカリキュラムマネジメントと「学校改善」との関係性を吟味する上で、「『運動会実践』は学校の創意工夫により保護者・地域との協働を図り、教職員の一致団結による共通理解によって実施される典型的な組織的実践であることから、「『運動会実践』は学校の創意工夫により保護者・地域との協働を図り、教職員の一致団結による共通理解によって実施される典型的な組織的実践であることから、『運動会実践』のカリキュラムマネジメントは、児童の集団性・自主性に関わる要素を育成し、『学校改善』『学校づくり』に有効である。」との仮説を検証する。

② 調査時期：2004年10月

③ 調査方法

（調査1．学校職員用）：2004年10月3日に実施された「運動会」の反省会議記録（10 月6日）を参考にした質問紙を作成し全職員 22 名に配布、全て回収した。（調査2．学校児童用）：運動会実施後、小学校 46 年全児童 149 人（有効回答数 118 人・79.19%）を対象に質問紙を配布・回収した。なお、回答の集計と分析には SPSS/Ver.11 を使用した。

④ 質問項目

（調査1．学校職員用）：「運動会実践」カリキュラムマネジメントの経営系列に関して、教職員の共通理解・一致団結を「内部的協働性」、学校と保護者・地域との連携を「外部的協働性」とし、そのアウトプットである「児童成長」も加えて、合計 13 項目の4件法で構成した[14]。

（調査2．学校児童用）：指導系列からみる「運動会実践」を通して、児童が自分自身や友達に関して自発性・集団性・主体性が高まったかどうか合計6項目の4件法で構成した。

V．調査結果および考察

1．「運動会実践」のカリキュラムマネジメントと「学校改善」

「運動会実践」カリキュラムマネジメントの構成因子を「内部的協働性」と「外部的協働性」と仮説的に質問項目を設定した。調査対象は全校職員であるが、22 人しかないことから、調査1ではクロス集計ではなく単純集計とした。

（調査1の結果は、表1の通りである。）

まず、「内部的協働性」の質問項目の数値平均は(3.29)であり、表 1 の 1)~6)を指す。特に職員全体で学校長・体育主任のリーダーシップを尊重して(3.45)、各学年・各担当で運動会を経営していこうとする職員意識(3.59)が表れている。

また、この醸成された「学校文化」の一端として、運動会実施後の反省会も建設的な意見交換がなされ(3.50)、来年度への改善意識が伺えた。

次に「外部的協働性」の項目は 6)~8)であり、平均値 3.41 である。本調査校では、水俣病患者多発地帯であることから、水俣環境再生の取り組みが盛んであり、地域振興目的で運動会もその一環として位置付けられ、新校舎も落成したばかりである。こうした要因で、「7)『水俣ハイヤ』の踊り等、地域も保護者も一緒になって運動会を創ろうとする。」は、極めて高くなっている。(3.81)。

更に、「運動会実践」カリキュラムマネジメントによる「学校改善」の結果である「児童成長」の項目は、「集団性・主体性の高まり」「一生懸命さ」等に関わることであり、一定値(3.33)を示した。

よって、以上の経営系列の項目に関連して、「運動会を通して、児童の集団性・自発性が高まり、以前より職員・保護者・地域のまとまりを感じるようになった。(3.59)」との「学校改善」効果を肯定した結果になったと考えられる。

2．特別活動にみる「学校づくり」のカリキュラムマネジメント
－児童の成長と「集団改善」に着目して－

特別活動（指導系列）の目標論から本事例の「運動会実践」に調査2で分析を加えた。

「望ましい集団活動を通して、個性の伸長を図るとともに、集団の一員としての自覚を深め、協力してよりよい生活を築こうとする自主的・実践的な態度を育てる」ことに合致していると、次の調査結果（単純集計平均）から理解できる。

まず「協力性」の質問項目は、「運動会を通して、みんなと協力してがんばることを学んだと思う。（3.03）」であり、「連帯感」では「運動会を通して、友達のいいところを発見することができたと思う。(3.12)」であった。次に「自発性」は、「運動会を通して、自分たちで進んで考え、学級や学校をよりよくしようとがんばることができたと思う。(3.05))」であり、「責任感」では、「運動会を通して、演技だけでなく係活動でも責任を果たせたと思う。（3.16）」、「地域参加」は「運動会では、保護者や地域の人々がたくさん参加して協力してくれたと思う。（3.01）」であった。

よって、以上を総括する「集団改善」（集団づくり）では「運動会を通して、前よりも自分たちの学級や学校がまとまったと思う。(3.22)」を示した。これらの項目の相関係数は、下記の表2の通りであり、特に「運動会実践」で育成される「連帯性」「自

（表１．運動会カリキュラムマネジメントの構成項目）

質　問　項　目	mean
1)運動会の計画をたてるときに、体育主任をはじめ、学校及び学年全体で協力し合って取り組もうとする。	3.45
2)教員相互でダンスや技巧走の内容を決めるのに、該当学年でよく話し合おうとする。	3.59
3)学校教育目標を照らし合わせて「めざす子ども像」を運動会に位置づけ運営していこうとする。	2.81
4)運動会の反省会議では、お互いの実践結果や意見を出し合い、建設的に検討し合あおうとする。	3.50
5)運動会で培った連帯感・達成感などを活かして職員が学校をよりよくしていこうとする。	3.13
6)運動会のプログラムの計画段階から、保護者・地域が積極的に関わろうとする。	3.40
7)「水俣ハイヤ 2001」の踊り等、地域も保護者も一緒になって運動会を創ろうとする。	3.81
8)保護者や地域の人等に、運動会の成果を学級通信などで分かりやすく説明し,今後につなげようとする。	3.04
9)児童の集団性が高まり、その後の日常の活動・授業でも変容があったと思う。	3.59
10)児童の係り運営について、児童の意見を活かしながら関係担当者と話し合おうとする。	3.09
11)児童が運動会を成功させようと係りや演技・競技に一生懸命である。	3.54
12)運動会の練習では児童自身が自分の考えを活かして自主的に活動させようとする。	3.13
13)運動会を通して、児童の集団性・自発性が高まり、以前より職員・保護者・地域のまとまりを感じるようになった。	3.59

発性」「地域参加」と学級・学校の改善である「集団改善」性の関係性に着目し、各々との相関係数は有意であると示された。

（「協力性」が有意でなかったことに、本研究の課題が残った。）

特別活動は、自己決定と集団づくりから成り立ち、学習者である児童の視点から本研究は学校づくりに焦点化している。

すなわち、以上の調査１・２の二系列（カリキュラムの内容方法論と条件整備論）により、「運動会実践」は学校の創意工夫により保護者・地域との協働を図り、教職員の一致団結による共通理解によって実施される典型的な組織的実践であることが理解できる。また、「運動会実践」のカリキュラムマネジメントは、児童の集団性・自主性に関わる要素を育成し、仮説の「学校改善」と緊密な関係性を持っていることが明らかになったと言えよう。

以上のことから、本研究の「運動会実践」のカリキュラムマネジメント論は、「学校改善論」の視点からそのイベントを経営する組織職員の意識と、「学校づくり」の視点から学習者である児童の視点とを交差させ、この概念が二系列を統合するものであることを論じる上で有効な示唆を得たと考えられる。

（表２．児童の成長と集団改善の相関関係）

相関係数

		協力性	連帯感	自発性	責任感	地域参加	集団改善
協力性	Pearson の相関係数	1	.115	.300**	.222*	-.017	.096
	有意確率（両側）	.	.214	.001	.016	.854	.300
	N	118	118	118	118	118	118
連帯感	Pearson の相関係数	.115	1	.205*	.249**	.390**	.349*
	有意確率（両側）	.214	.	.026	.006	.000	.000
	N	118	118	118	118	118	118
自発性	Pearson の相関係数	.300**	.205*	1	.317**	.104	.277*
	有意確率（両側）	.001	.026	.	.000	.263	.002
	N	118	118	118	118	118	118
責任感	Pearson の相関係数	.222*	.249**	.317**	1	.433**	.279*
	有意確率（両側）	.016	.006	.000	.	.000	.002
	N	118	118	118	118	118	118
地域参加	Pearson の相関係数	-.017	.390**	.104	.433**	1	.226*
	有意確率（両側）	.854	.000	.263	.000	.	.014
	N	118	118	118	118	118	118
集団改善	Pearson の相関係数	.096	.349**	.277**	.279**	.226*	1
	有意確率（両側）	.300	.000	.002	.002	.014	.
	N	118	118	118	118	118	118

**. 相関係数は 1% 水準で有意（両側）です。

*. 相関係数は 5% 水準で有意（両側）です。

Ⅵ. 結語

本研究は、学校経営の中心であるカリキュラムの開発・経営の「統合」された二系列が、どのような「学校改善」と「学校づくり」効果を持ち、学習者である児童にどのような学習効果をもたらすのかを命題に、筆者の勤務校を対象に特別活動の視点から「運動会実践」カリキュラムマネジメントの実証的検証を試みた。

特別活動とは、児童の集団性・自発性を学校・社会との関係性において育成を図る指導・学習論であるが、その最大の特徴は教科書・指導書が存在せず、独自に学校・教師がカリキュラムを開発・経営していく典型的なカリキュラムマネジメントにある。特に経営系列からみる運動会運営では、学校組織内部でも教師集団が積極的な学校文化を形成し、保護者・地域を活用する協働性を必要とする。更に特別活動（指導系列）からみる「運動会実践」は、児童の心身の発達と個性の伸長を図るとともに、集団の一員としての自覚を深め、協力してよりよい学校生活を創造しようとする自主的な態度の育成を教育目標とする。

よって本事例は、特別活動の視点から「運動会実践」に焦点を当てて、そのカリキュラムマネジメントの「統合」された二系列が、「学校改善」と緊密な関係を持つことを実証した。また、本研究の「運動会実践」のカリキュラムマネジメント論の特徴は、学校組織を経営する「学校改善論」の視点と、特別活動の「学校づくり」論が対象にする児童の視点とを交差させ、この概念が二系列を統合するカリキュラムマネジメント論を考察していく上で、有効と考えられる研究方法論を提起したことであろう。

つまり、本研究は、特別活動教育論の分析視点から、二系列を「統合」するカリキュラムマネジメント論の一断面を明らかしたことに、一定の研究上の価値があると言えよう。

注

(1) 日本カリキュラム学会 15 回大会(2004 年)は、課題研究Ⅰでカリキュラムマネジメントの課題研究を設定し、田村知子「カリキュラムマネジメントの構造化とカリキュラム文化」等の発表があり、この研究分野は注目されている。

(2) 高野桂一編『教育課程経営の理論と実際』教育開発研究所　1988 年。

(3) 中留武昭「カリキュラムマネジメントのデザインを創る-総合的な学習のカリキュラム開発に焦点をあてて-」中留武昭・論文編集委員会編『21 世紀の学校改善』第一法規、2003 年　146-166 頁。

(4) 中留武昭「教育課程経営の実態と課題」『学校経営の改革戦略　日米の比較経営文化論』玉川大学出版部　1999 年 100 頁。

(5) 高旗 正人・倉田 侃司「新しい特別活動指導論」ミネルヴァ書房　2004 年。

(6) 中留武昭『スクールリーダーのための学校改善ストラテジー』東洋館出版　1993 年。

(7) National youth Leadership Council、Route to Reform:Service-Learning and School Improvement、National youth Leadership Council、1995.

(8) 前掲書 中留武昭『スクールリーダーのための学校改善ストラテジー』p54。

(9) 山口五郎・羽生隆英・松下静男・原清治『特別活動の理論と実践』学文社 2002 年。

(10) 例えば、「集団づくり」の研究団体には、全国生活指導研究協議会 http://members.jcom.home.ne.jp/zenseiken/

(11) 文部科学省・公式ホームページを参照した。http://www.mext.go.jp/

(12) 例えば、「全国個を生かし集団を育てる学習研究協議会」http://ww6.enjoy.ne.jp/~juntendomt/index.htm 等がある。

(13) 本校は水俣病患者多発地帯であり、患者の苦しみ・環境再生への願いから「新水俣ハイヤ節・2001」を地域住民と劇団で作成した。本校の運動会で注目を浴び、水俣市開催の平成 13 年度・国際水銀会議で児童も一緒に披露した。カリキュラムマネジメントの典型的な学校外部との「協働性」であった。

(14) 日本学術振興会科学研究費補助金「教育課程規準の大綱化・弾力化と学校の自主性・自律性との連関性を規定する要因の研究」研究代表者/中留武昭のサーベイ調査を参考に、「運動会実践」(職員用)の質問項目を作成した。